□坂村 健（編）：**デジタルミューゼアム** 95 pp. 1997. 東京大学総合研究博物館.

東京大学総合研究資料館は，1996年に東京大学総合研究博物館に改組された．これに伴う大きな変化は，資料のデータベース化で，とくに画像情報に重点を置き，このネットワークサービスに取り組む方針である．本書はこれを記念する特別展の図録で，電脳博物館—博物館の未来と副題がついて，電脳化の様々な手法と，その対象となる様々な分野の資料について，解説されている．CD-ROMが付録としてあり，図録の内容のほかにも多くのトピックにアクセスできる．電脳化はこれからの標本・資料の利用公開に欠かせない手段であり，どの標本室でもとりかかることになるが，その実現には標本・資料のデータ化という金も時間も人手（それも資料についての十分な知識をもつ人手）もかかる作業が待ち構えており，しかもそれを行うためには，標本資料の整理という基本作業が優先することを忘れないでほしい．肝心なのは標本室の拡張ではなかろうか．入手希望者は東大出版会に問い合わせられたい． （金井弘夫）

□丹羽基二: **日本苗字大辞典** 1979＋1977＋2098 pp. 1996. 芳文館. ￥330,000.

高校国語教師の著者のライフワーク．世界で一番多いといわれる日本人の苗字291,531件を，①よみ順，②頭字画順，③末字画順に配列し，よみとローマ字をつけてある．既製のパタンがなくて，新たに作った漢字は13,000件に達するという．これだけでも国字研究への貢献は大きい．こういう辞典は世界でも最初のものらしい．ユニコードという世界共通文字コードの開発が進んで，文字情報の国際化が達成されれば，こういう辞典は日本のみならず，世界の共通財産となるだろう．苗字は民族のルーツと交流の歴史を反映しているが，その85％は環境としての地名に由来しているという．植物関係の苗字はどれほどあるか，民俗植物学研究の絶好の資料である．三冊で13.5kg，おまけにこの値段では，個人としては無理だろうが，各地の図書館に，重要参考図書として購入を要求すればよかろう． （金井弘夫）